

VoIP ビジネスを 変えるSIP

キャリア各社がIP電話の protocols として SIP を起用し始めた。この流れが企業向けの VoIP システムにも及んできている。SIP によって今後の VoIP ビジネスはどう変わるのか。パート1でSIP対応を進める機器メーカーの動向を追う。パート2では昨年7月に更新されたSIP規格の特徴を、パート3では、SIPを使った企業ネット提案のポイントについて解説する。
(本誌・大谷聖治)

Part 1 業界動向

IP電話への対応が焦点 企業向けでは訴求力に疑問も

キャリア各社の多くがIP電話の protocols に SIP を採用する背景には、標準規格の進化と、それをういたメーカー/ベンダー側の意欲的な製品開発がある。SIP をめぐる通信機器業界の動きをチェックする。

IP電話/VoIP市場で「SIP」(Session Initiation Protocol)という言葉がさかんに使われるようになった。

IP電話で先行するYahoo!BBの追撃に向けて昨年11月以降に続々と参入したISP各社のサービスのほとんどがSIPを採用したことがきっかけだ。

この背景には、SIP規格自体の進化がある。インターネット技術の標準化団体であるIETFが定めるRFC2543から、2002年7月に策定された新しいSIPのバージョンRFC3261に更新されたことで、「キャリアレベルでの利用にも耐え得る仕様になった」(業界関係者)。そして、この仕様に基づいた各種システムの製品化に、メーカー/ベンダーが乗り出した

ことで、SIPネットワークの構築が進んだというわけだ。

通信機器メーカー/ベンダーのSIPへの取り組みを見てみよう。

音声主体からの脱却が課題

ノーテルネットワークス・キャリア VoIPソリューションズの高木淳プログラムマネージャーは、キャリア・ISP側のVoIPサービスに対する意識として、「まだまだ音声を主体に考えている段階にある」という。そして、ここにビジネスチャンスを見出している。

同社が提供するSIPアプリケーションサーバー「Interactive Multimedia Server (IMS)」は、2年ほど前からトライアルを進め、商用版となるバージョン1.1を昨年末に海外でリリ

ース。日本国内では今年4月ごろの投入を予定している。同社はすでに大手キャリアを中心にアプローチを開始している。

高木マネージャーは、「IMSの特徴は、ビデオコールやWebページ共有、Web上であらゆる設定を事前に行えるスクリーニング機能等々、SIPの本当の価値であるWebやマルチメディアと音声を融合するアプリケーションを多数実装していること」と説明する。

また、VoIPの課題となるNAT越えについても、企業側の既存の仕組みを変更することなく、ネットワーク側の制御によって解決する機能も提供する。

こうしたセンター側のシステムと併せて、エンドユーザー向けのSIP対応端末についても、ハードホンだけでなくPC用のソフトホン、さらにWeb上で使える「SIP Multimedia Web Client」も用意した。

沖電気工業はキャリア向けのソフトスイッチ「CenterStage」のシリーズ製品として、2002年9月にSIPサーバー「CenterStage NS」をリリースした。SIPのプロキシ・レジストラ・ロケーションのサーバー機能の分散配置を可能にするもので、いくつかのキャリアで運用実績を上げている。

IPソリューションカンパニー・IPシステム企画開発本部IP電話普及推進部の川西素春部長は、「事業者側のIP電話に対する投資は、実際のと

図1 IP電話サービスで利用される主なSIP対応機器

